

インドの手ざわりを
取り入れた
ファッショニ・ブランド
HaaT

皆川 魔鬼子
(みながわ まきこ)

(株)イッセイミヤケ 取締役企画技術ディレクター
テキスタイルデザイナー

ンドを始めた背景にある、

ントを始めた背景にある。
初めてインドを訪れたのは一九八三年の暮れだった。このときグジャラート州アーメダバード市にある、優れた染織のコレクションで有名なキャリコ博物館を所有するサラバイ家の夫人と出会い、インドの職人の最高の手技を世界に見せたいと提案されたのだ。そのときは、以後二十年以上も継続してインドとのコラボレーションでもの作りをすると、は考えてもいなかつた。

わたししかイングランドに興味をもつたきり
かけは、広大な国で資源が沢山あるのに
最小限のもので生活がまかなえ、時を経

エーティフの原点

商品デザイン開発の現場からの視点」というテーマを今回はいただいたのでわたくしが感じたインドのことを少し書いてみる。わたしが企画しているファッション・ブランドHaaTはインド製と日本製を三対七の割合で構成している。きらびやかでない贅沢さと、オリジナルな素材感のある服、をコンセプトとしたマーチャンダイジング構成だ。後ほど説明を加えるが、ひとつの狙いはインド独特の日本人が忘れてしまった一見質素なようで、じつは時間を費やしたもの作りを伝えたかったことである。また、わたしはテキスタイルデザイナーとして、服のデザインよりも素材に重点を置いた服作りを考えていた。そのような発想がこの「ラ

かけは、広大な国で資源が沢山あるのに最小限のもので生活がまかなえ、時を超えてものを大切にあつかう人びとの国だということに気づいたことである。今でいうエコライフの原点がそこにはありました。これは貧富の差にかかわらずインドの人びとに共通するライフスタイルだと思うが、誰もが、たとえ外国製品を購入できる人でさえ、国産品を使用することを誇りにしていた。そして家では縫製しない布地だけの衣服「サリー」を、日本人が以前していたように畳んで積み上げて美しく保存していた。また「タリ」は一枚の皿で何種類もの料理が済ませられる合理的な食事だと思った。

機能と美的感覚との融合

インよりも素材は重点を置いた服作りを考えていた。そのような発想がこのプラ

バングラデシュ復興のために

女性たちを変えた 「ノクシカタ」

小松 豊明
(こまつ とよあき)

特定非営利活動法人
「シャプラニール=市民による海外協力の会」
クラフトリンク・チーフ

「シャブラン」一派は、市民による海外協力の会は、バンガラデシュ独立の直後、一九七二年に活動を開始したNGOである。独立戦争によつて疲弊したバンガラデシュの、特に農村部における復興支援活動がきっかけとなつてゐる。

活動を始めて間もない一九七四年、ある農村で結成された女性協同組合の活動として、ジュート製品作りが始まつた。ジュートはバングラデシュの特産品で、広く日常用品としても使われていた身近な素材である。女性たちはシーカ（吊り飾り）などの製品作りの研修を受け、彼女たちが作つた製品をシャブラン一派が買い上げて日本で販売するというかたちで、女性たちの収入向上を図ろうとした。現在「クラフトリ

そのカタに装飾的な文様の刺繡を施し、商品化することにより、働き手を失った女性たちの収入向上に結びつけたのが開発援助活動をおこなうNGOである。カタは刺繡の模様(ノクシ)が施されたノクシ



ノクシカタを刺す女性たち。大きな製品になると、
このように数人で同時に作業を進める



右側がパルルさん。再婚はしないの？ときくと、「そんな考えは池に捨てたわ！」と笑顔で答えた

卷之三

そのなかで、ジユート製品と並んでシヤプラニールの代表的な取りあつかい商品となつてているのが「ノクシカタ」である。バングラデシュが位置するベンガル地

一九七二年に活動を開始したNGOである。独立戦争によつて疲弊したバングラデシュの、特に農村部における復興支援活動がきっかけとなつてゐる。

活動を如くして間もない一九四四年の春、活動で結成された女性協同組合の活動として、ジユート製品作りが始まつた。ジユートはバンガラデシュの特産品で、広く日本でも使われていた身近な素材である。女性たちはシーカ（吊り飾り）などの製品作りの研修を受け、彼女たちが作った製品をシャープナールが買い上げて日本で販売するというかたちで、女性たちの収入向上を図ろうとした。現在「クラフトリ

このように、ノクシナタの生産により、結果的に収入をえられることは、女性の就業機会が限られているバンガラテシユの農村において、非常に大きな意味をもつ。また、経済的な変化だけではなく、女性たちが自分たちの手で現金収入をえることで自信をつけ、あるいは家庭のなかで発言権を増すといった社会的な変化も重要である。この仕事を始めて変わったことは?という質問に対し、多くの生産者が異口同音にこう答えてくれる。「以前は子どもの文房具ひとつ買うにもいちいち夫にお伺いを立てなければならなかつた。でも今は、自分の判断でお金をつかうことができる。夫が自分の言うことを聞いてくれるようになつて、とても嬉しい」。



ビリ刺繡のネックウェア（HaaT Collection より）